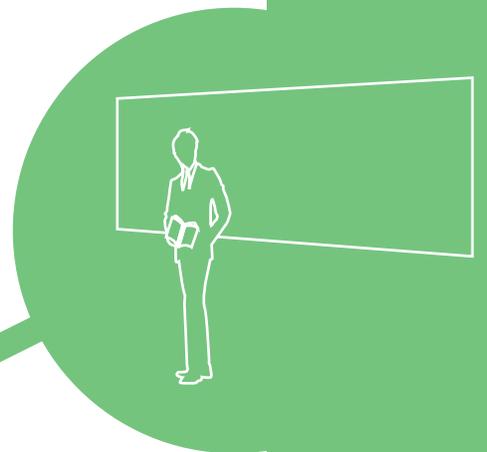


PEPNet-Japan

Postsecondary Education Programs Network of Japan

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

遠隔情報保障支援ガイドライン



目次

本ガイドラインについて	……	1
1. 遠隔情報保障支援とは	……	2
2. 遠隔情報保障支援によって実現できることとは	……	5
3. 遠隔情報保障支援を導入するには	……	6
4. 大学内で遠隔情報保障支援を実施するには	……	7
5. 大学間で遠隔情報保障支援を実施するには	……	9
おわりに	……	10

本ガイドラインについて

遠隔情報保障支援はこれまで困難であった場面での情報保障や人的リソースの有効活用を可能にするツールです。適切な運用にあたっては、その特性をよく把握し、また技術的知識を身に着ける必要があります。

本ガイドラインは、遠隔情報保障支援の導入を検討されている大学の皆さまを対象に、PEPNet-Japan が編集・発行した「遠隔情報保障支援実践マニュアル」から、ポイントを抜き出して、運用に至るまでの概要をまとめたものです。上記マニュアルと併せてご活用いただき、遠隔情報保障支援の導入をご検討ください。皆さまの情報保障支援実践の充実に向けての一助となることを願っています。

1. 遠隔情報保障支援とは

遠隔情報保障は、聴覚障害学生が授業を受講する現場から離れた場所で支援を行うものです。このガイドラインでは遠隔でパソコンノートテイクを実施する方法について、その導入に至るまでの概要とポイントを説明します。

遠隔で行うパソコンノートテイクには、いくつかのシステムや実施方法があります。

①教室内で支援担当学生と支援利用学生が離れて着席できる方法

→【無線 LAN を介して連係入力を行うシステム】

従来スイッチング HUB を介して、LAN ケーブルにより接続していたノートパソコン同士を、無線 LAN ルータを用いて接続するシステムです。この方法を用いれば、支援担当学生と支援利用学生は必ずしも隣同士の席である必要はなく、支援利用学生が自由に席を選ぶことができるので、「友人と一緒に授業を受けたい」「支援担当学生から離れて座りたい」などの要望に対応することができます。

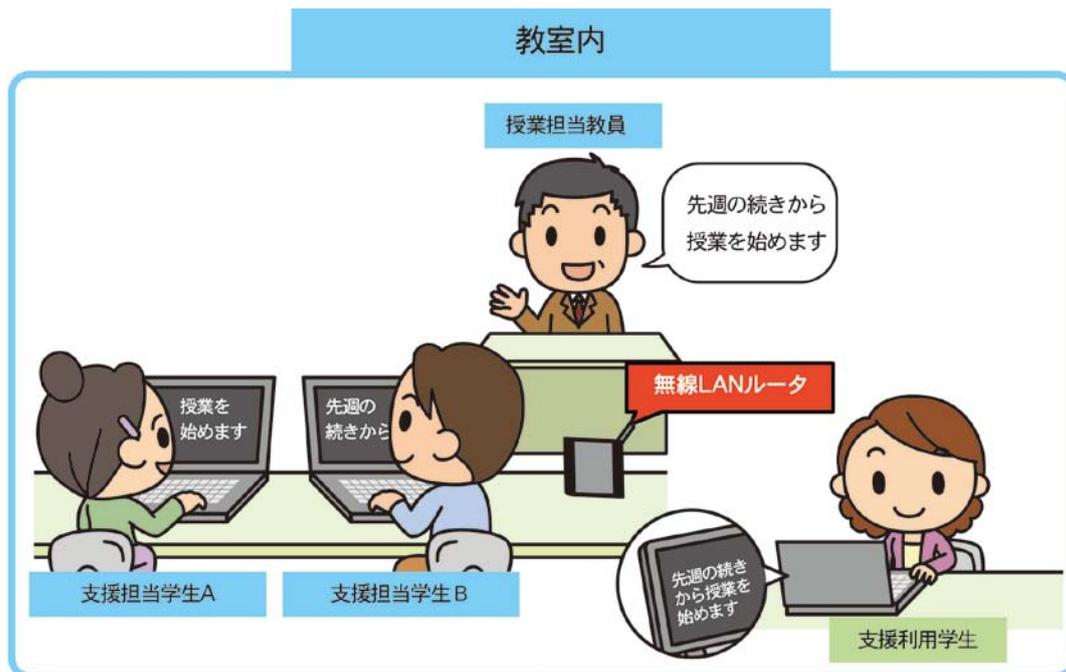


図 1 無線 LAN を介して連係入力を行うシステム

②遠隔にいる支援担当学生と連携してパソコンノートテイクを実施する方法

→【VPN(Virtual Private Network)を介して遠隔で連携入力を行うシステム】

VPN(Virtual Private Network)接続という技術を用いて、遠隔にいる支援担当学生どうしのノートパソコンが同じネットワーク空間にいる状態を作りだします。

この方法を用いれば、支援担当学生がお互いに遠隔地においても連携入力を行うことができます。現場で入力を行う支援担当学生が1名しか確保できない場合、異なるキャンパスや別の大学、自宅などにいるもう1名と現場の支援担当学生がペアを組んで連携入力を行うことが可能ですので、人的リソースを有効に活用できます。

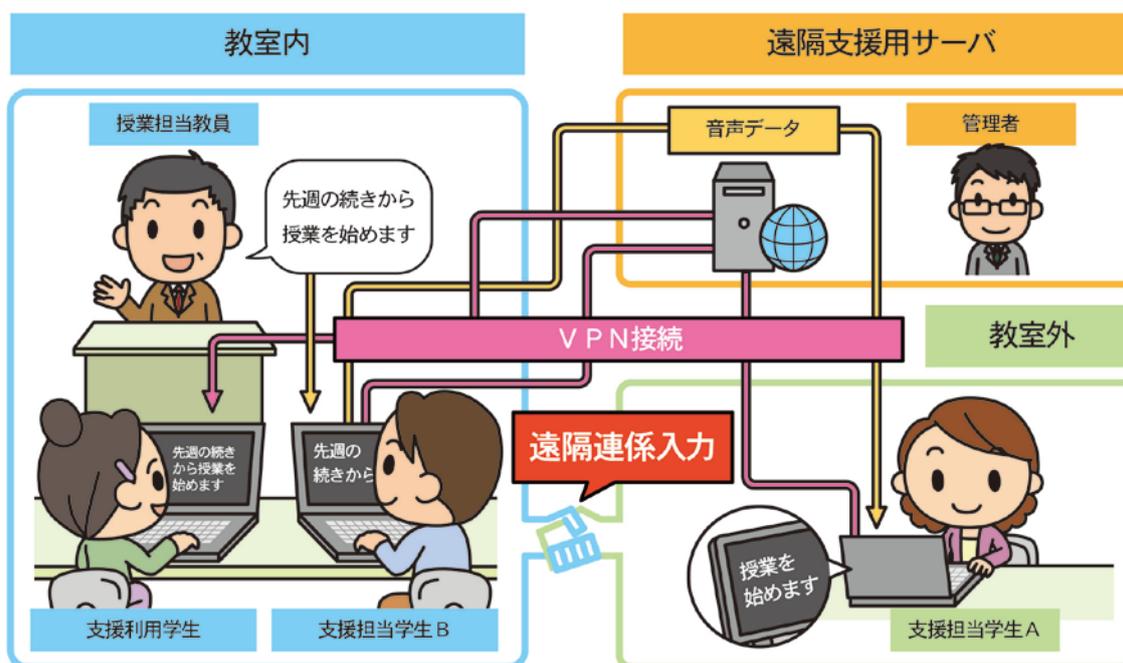


図2 VPN(Virtual Private Network)を介して遠隔で連携入力を行うシステム

③座学の講義で、別室でパソコンノートテイクを実施する方法

→【モバイル型遠隔情報保障システム】

ここでは、モバイル型遠隔情報保障システムを例に説明します。教室内で使用する機材は携帯電話端末と講師用のマイクロフォン（Bluetooth 機能付き）のみです。講義の音声は、携帯電話の通話機能を用いて別室にいる支援担当学生に送信されます。受信音声を聞いて入力された文章は、インターネット通信を介し支援利用学生の手元にある携帯電話端末に提示されます。

この方法を用いれば、移動や活動を伴う実習、実験、見学等の授業や、屋外での授業で情報保障を行うことができます。また、支援担当学生が教室などの現場に行く必要がないので、広いキャンパスをもつ大学や、大学間での情報保障に利用することで、人的リソースを有効に活用できます。

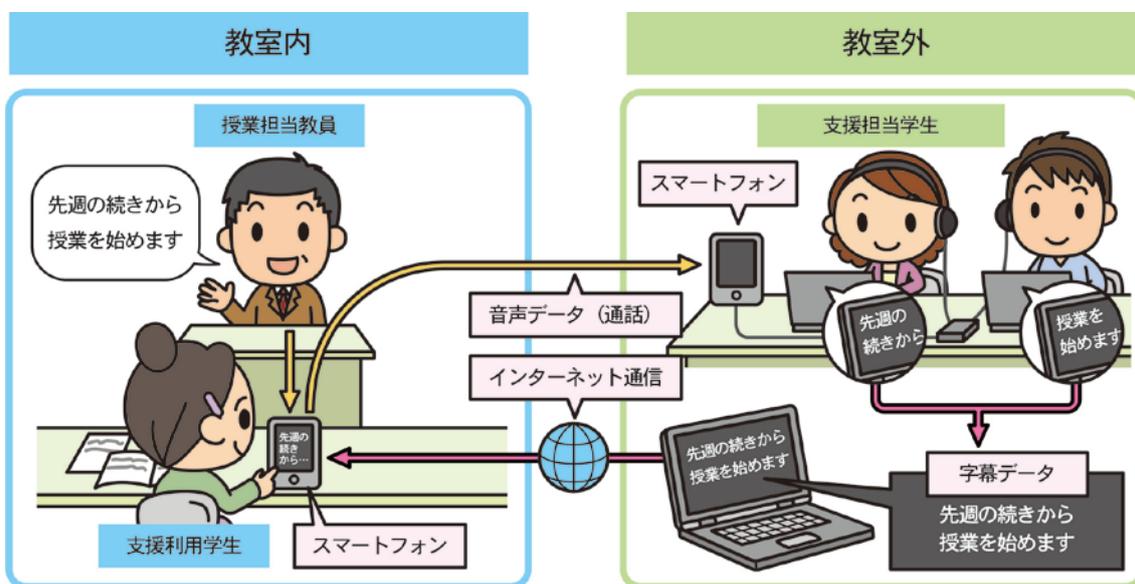


図3 モバイル型遠隔情報保障システム

各システムの詳細については、PEPNet-Japan『遠隔情報保障支援実践マニュアル』やホームページ掲載の『技術マニュアル』をご参照ください。

2. 遠隔情報保障支援で実現できることとは

遠隔情報保障支援の実施により、以下のような効果が期待できます。

- ◆ 支援人材の確保・有効活用
- ◆ 支援人材の適材適所への配置
- ◆ 移動を伴う場面、屋外での利用
- ◆ 支援利用学生の行動・心理面への配慮

また、副次的効果として、支援担当学生の技術的なスキルの向上、授業担当教員の情報保障への関心増大等が期待されます。

3. 遠隔情報保障支援を導入するには

遠隔情報保障支援による効果を最大限に発揮するには、その特性（長所・短所）や使用するシステムについて熟知し、適切な使用場面を選択することが大切です。

使用場面については、下記の遠隔情報保障の授業適性チェックリストを参照してください。「はい」が多ければ遠隔情報保障支援への適性はより高くなります。

表1 遠隔情報保障の授業適性チェックリスト

授業の形式		
①教員が一方向的に話をして進めることが多い	はい	いいえ
②グループワークが少ない	はい	いいえ
③授業中、移動をとまなうことがある	はい	いいえ
④映像教材は多用しない	はい	いいえ
授業の専門性		
⑤専門知識をあまり必要としない	はい	いいえ
授業をとりまく環境		
⑥2時間目以降の授業である	はい	いいえ
⑦担当教員が毎週固定している	はい	いいえ
⑧授業室が狭く、支援担当学生の入力場所の確保が難しい	はい	いいえ

また、遠隔情報保障支援は、学内の障害学生支援担当部署の中だけで完結することができません。支援利用学生が在籍する（授業を担当する）学部など関係者間との連携が不可欠です。また、利用するシステムによっては、学内のネットワーク管理部門担当者への確認や調整が必要となります。

4. 大学内で遠隔情報保障支援を実施するには

遠隔情報保障支援の実施が決定したら、下記に示すような具体的な準備を進めます。これらの作業は授業開始前までの作業です。準備作業確認のチェックリストとしてご活用ください。

表2 授業開始前の準備作業 チェックリスト

準備作業項目	チェック
①教室内や入力場所のネットワーク環境を確認する	<input type="checkbox"/>
②システムの動作確認を行い、使用するシステムを決定する	<input type="checkbox"/>
③使用する機材を準備し、管理方法を決定する	<input type="checkbox"/>
④入力場所を確保する	<input type="checkbox"/>
⑤支援学生を募集する	<input type="checkbox"/>
⑥学生や支援担当教職員への技術指導を行う	<input type="checkbox"/>
⑦不測の事態に備えバックアップ体制を準備する	<input type="checkbox"/>
⑧ネットワーク・音声などの接続テスト・リハーサルを行う	<input type="checkbox"/>
⑨遠隔情報保障支援を実施する授業を決定する	<input type="checkbox"/>
⑩授業担当教員に協力を依頼する	<input type="checkbox"/>
⑪支援担当学生の適性を見極めて配置する	<input type="checkbox"/>
⑫支援利用学生への説明を行う	<input type="checkbox"/>

実際の授業の前には、教室や入力場所で休み時間を効率よく利用して機材等のセッティングを行います。

実施中、ネットワークのトラブルなど、情報保障が中断することが起きる可能性があります。トラブル時には前もって決めてある表⑦のバックアップ体制で情報保障を行いましょう。

授業終了後は、支援状況を記録し、振りかえりを行うとより良い支援につなげることができます。遠隔情報保障支援で求められるスキルの向上や対応方法の工夫、情報保障の質の担保について、知識と経験を蓄積させてゆくとよいでしょう。

5. 大学間で遠隔情報保障支援を実施するには

学内で支援者確保や専門性の担保が十分に行えない場合、大学間遠隔情報保障支援によって、それらの問題を解決できることがあります。しかしながら、大学間遠隔情報保障支援では、支援利用大学・支援担当大学双方が主体性と責任をもって取り組まなければなりません。そのためには、まず学内で遠隔情報保障支援の経験を積み、そこで解決できない課題を大学間遠隔情報保障支援に求めるべきでしょう。

実施までの準備作業は、大学内の遠隔情報保障支援とほぼ共通ですが、これに加えて大学間での合意や調整の作業が必要となります。特に、それぞれの大学で方法が異なるため、大学間での調整が必要と考えられる作業を下記に示します。チェックリストとしてご活用ください。

表3 大学間遠隔情報保障支援に向けた合意・調整 チェックリスト

合意・調整項目	チェック
①各大学の担当職員を明確にして基本的なスタンスを調整する	<input type="checkbox"/>
②謝金のあり方を検討する	<input type="checkbox"/>
③守秘義務と個人情報の扱いについて確認する	<input type="checkbox"/>
④入力ログの扱いについて検討する	<input type="checkbox"/>

利用するシステムによっては、各大学のネットワーク関係者との調整が必要となりますので、事前の接続テストは、十分な時間をかけてリハーサルを行うと良いでしょう。

また、事前に、支援担当学生や支援利用学生のプロフィールを交換することで、連帯感を持って遠隔情報保障支援に取り組むことが期待できます。

授業実施後は可能な範囲で情報交換を行い、課題点を整理すると良いでしょう。

おわりに

本ガイドラインでは、遠隔情報保障支援の特性と導入に至るまでの概要についてご紹介しました。遠隔情報保障支援の実施までに非常に多くのステップをふんでいかなければなりません。遠隔情報保障支援で実現できることのメリットも大きいと言えます。各大学の支援体制に合った情報保障手段は当該大学の支援担当職員の手任せられています。

授業での情報保障支援の1つの手段として遠隔情報保障支援を知っていただき、導入を検討することで支援体制の充実につなげていただけることを願っています。

「遠隔情報保障支援ガイドライン」

発行日：2014年6月1日

編集：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan)
遠隔情報保障事業メンバー

発行：国立大学法人 筑波技術大学

本ガイドラインは日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 遠隔情報保障事業(代表：中野聡子)の活動成果であり、本事業は筑波技術大学「聴覚障害学生支援・大学間コラボレーションスキーム構築事業」の活動の一部です。



A large green circle is centered on the page, containing the title text in white. The circle is solid and has a smooth edge.

遠隔情報保障支援
ガイドライン